日本語の分析に基づく表出主義

高内 洋子

1. はじめに

冬の朝、布団から出た瞬間思わず「寒い！」と声に出る。この言葉に真偽はあるだろうか。これが仮に「部屋が寒い」という言葉であったなら、真偽はあると言うことができるかもしれない。なぜなら、部屋が実際に寒ければ真、そうでなければ偽だと主張しうるからである。しかし、肌を刺すような感覚に思わず発せられた「寒い！」という言葉について、いったい何がどうであれば真であり、どうでなければ偽だと言えるのか。この言葉の真偽を問うこと自体、なにか不適切であるようにさえ思われる。

これと同じ発想をルーツとして持つのが、道徳文についての表出主義 (expressivism) である。この立場によれば、道徳文はある行為や出来事に対する是認あるいは否認の態度表出である。その主張から自然と導かれるように思われるのは、道徳文は真偽を問えず、論理性もないということである。なぜなら、「X は悪い」という道徳文は「X 反対！」という否認の態度を表出するものだということになるからである。何らかの事象 X に対する「反対！」という否定の原初的表出そのものについて、何がどうであれば真であり、どうでなければ偽だと言えるのか。

それでもなお、「X は悪い」という道徳文は一見すると真偽を問えるかのような文の形を持ち、実際の日常会話においても論理的に振る舞うことができているように見える。そうでなければ、道徳について議論を交わしたり、誤りを指摘することさえできなくなってしまう。したがって、表出主義は、本来ならば真偽を問えないはずの原初的表出が、いかにして真理値を獲得し論理的に振る舞えるようになるのかを説明しなければならない。

本論文では、まず道徳文についての表出主義の立場を確認し (2 章)、感覚を表す文における表出文と記述文の違いおよび真理値出現の条件を考察する (3 章)。次に、感情を表す文について表出文から記述文への変遷に伴う主体性の変化に注目しながら (4 章)、その上で感情／感覚主体の分節化とそれにともなう主体性の度合いの変化を確認し (5 章)、原初的感覚の投射は対象の側だけでなく主体の側へもなされるのだということを示す (6 章)。以上を踏まえた上で、これらの投射が感情／感覚を表す文だけでなく、道徳文を含めた文

一般についてなされているという可能性を示唆したい (7 章)。

2. 道徳文についての表出主義

エイヤー (A. J. Ayer) によれば、道徳文はある行為や出来事に対する否定的あるいは肯定的な情動の表出であり、真偽を問うことができない。つまり「X は悪い」という道徳文は「X なんて！」という叫びそのものである。それゆえ、道徳文は本物の命題を表現していない。

> ［…］私が誰かに「君が金を盗んだことは悪い」と言う場合、単に「君が金を盗んだ」と言う以上のことを私は何も述べていない。［…］それはあたかも私が嫌悪感をあらわにした独特の調子で「君が金を盗んだ」と言ったのと同じである。あるいはその言葉にいくつかの特定の感嘆符をつけ加えて書いたのと同じである。声の調子や感嘆符は文の字義上の意味には何もつけ加えない。［…］それはただ話し手のある道徳的な感情を表出しているに過ぎないのである。(Ayer, 1936, p. 107)

> ［…］私が「金を盗むことは悪い」と言うならば、私は事実的な意味を持たない文、すなわち、真か偽かでありうるような命題を表現してはいない文を作り出しているのである。それはあたかも私が書いた「金を盗むなんて!!」の感嘆符のかたちと太さが、適当な取り決めによって、ある特定の種類の道徳的否認の感情を表出していることを示すようなものである。(Ayer, 1936, p. 107)

この立場は情動主義 (emotivism) と呼ばれる。道徳文は世界のあり方についての記述ではない。世界がどうあってほしいか、どうあるべきかについての欲求の表出である。このような立場に立つ情動主義は、非記述主義 (non-discriptivism) の一つに数えられ、欲求等を表出するという意味で、表出主義と呼ばれる。他方、記述主義 (discriptivism) とは、道徳文の機能は何らかの事実についての記述であると主張する立場であり、非記述主義とは真っ向から対立する。

記述主義に対して、非記述主義には利点がある。代表的なものとしては、形而上学的な実在の想定と認識にまつわる難点を回避できる点である。記述主義を素直に受け取るならば、道徳的事実という形而上学的な実在が前提となっているように思われる。しかし、そのような実在を人間がどのようにして認識しうるのかという問題が生じる。非記述主義にとって、道徳文の機能とは世界の事実についての記述ではなく非記述的な心的状態の表出

であるため、道徳についての形而上学的な存在者を措定する理論的な必要性がない。それゆえ、そのような存在論および認識論的難問には煩わされることなく議論を進めることができる (田村, 2007, p. 36; Chrisman, 2017, p. 33)。

それに対して、記述主義にも利点がある。非記述主義者がどれだけ理由を並べ立てようとも、われわれが日々使用している道徳文とは、結局のところ記述的な体裁をとっているのが実情であり、これは揺るがしようのない事実である。記述主義はその事実を文字通りに受け取ればよいため、非記述主義のように複雑な理論を駆使して整合性をとる必要がない。これは記述主義の最も大きな利点である。

したがって、非記述主義が道徳文の実際の使用状況を認めた上でその立場を維持するためには、われわれが、なぜわざわざ「X は悪い」という記述的な体裁をとるのかという問いに対して答えなければならない。そして、この問いは、事実文と道徳文がなぜ同じ文法形式を持つのかという問いと問題意識を共有する。というのも、論理実証主義の立場から、エイヤーは事実文に関して記述主義をとるためである。つまり、エイヤーは事実文については記述主義、道徳文については非記述主義をとる。にもかかわらず、実際には、われわれは両者を同じ記述的な文法形式によって扱っている。このギャップをどう説明すべきか。エイヤーの議論はこのことに答えていない。

以上のように、非記述主義や表出主義には、記述主義が引き受けざるを得ない形而上学的な実在の想定と認識にまつわる難点を回避できるという大きな利点がある。だが、非記述主義がその正当性を主張するためには、次の問いに答えなくてはならない。すなわち、本来ならば真偽を問えないはずの情動の表出が、いかにして真理値を獲得し論理的に振る舞えるようになるのか。

この問題は、多くの論者によって論じられてきた。たとえばブラックバーン (S. Blackburn) による準実在論 (quasi-realism) の立場は、この問題を説明しようとする一つの方法でもある。準実在論とは、あたかも真偽があるかのように見えるわれわれの言語実践を、実在論的な方法によらず表出主義的に説明するプロジェクトである。「表出主義では道徳文を含むモードゥス・ポネンス (modus ponens) の妥当性を説明できない」というフレーゲ・ギーチ問題 (Frege-Geach problem) は、実在論を採りさえすれば問題自体がそもそも生じない。文は表出されようがされまいが同じ真理値を持つと実在論的に考えれば、その妥当性を真理関数的にすんなり説明できるからである (Geach, 1965)。だがブラックバーンはその方法を採らず、表出される態度間の関係に基づき道徳文の論理的関係を構成することで、本来は真理値のない表出が真理値を持つようになる様を描こうとする (Blackburn, 1984, pp. 181–223; Miller, 2003, pp. 52–94; 久米, 2012)。

しかし、本論文ではそれに対して別の立場を取ってみたい。その立場とは、日本語の文構造を分析することにより、表出が真理値を獲得するプロセスに迫るというものである。ブラックバーンとの大きな違いは、複数の文同士の論理的関係が問題となる以前の、文が単体で構成される様子を描くところにある。

3. 表出文と記述文の違い、および真理値出現の条件

本論文の冒頭でも記したように、「寒い！」という表出の表現は真理値を持たない。しかし、「部屋が寒い」といった記述的な表現では、文は真理値を持つようになる。仮に前者を表出文、後者を記述文と呼ぶならば、表出文に真理値がなく記述文に真理値があるのはいかなる事情によってか。

まずは、表出文と記述文がどのような関係に立っているのかということを考えるために、先の例文をあらためて検討したい。

(1) a. 寒い！
　　b. 部屋が寒い。

表出文 (1a) と記述文 (1b) の違いとは、対象の有無である。(1b) には「部屋」という対象が明示されており、それによって「部屋」が実際に寒ければ真、そうでなければ偽だと言うことができる。それゆえ (1b) には真理値がある。その一方で、(1a) には対象が明示されておらず、「寒い」という感覚だけにフォーカスがなされる状況が表れている。このことから (1a) には、話し手の意識のなかに、自分を寒いと感じさせる具体的な対象が出現する以前の状況が表れていることがわかる。つまり、「寒い！」という単純な表出においては、話し手自身が事態に没入し、対象と話し手が未だ分化されていないという状況があらわになっている。

以上のことからわかるのは、表出文 (1a) と記述文 (1b) の違いとは、対象が明示されているか否かに何か関わりがあるということである。

だが、次の例文を見ると、また別の可能性が見える。

(2) a. 寒い！
　　b. 私は寒い。

表出文 (2a)、記述文 (2b) には共に対象が明示されていない。にもかかわらず、(2b) には

真理値がある。というのも、「私」が実際に寒いと感じれば真、そうでなければ偽だと言えるからである。つまり、(2a) と (2b) の違いとは「私」という感覚の主体の有無である。両者は一見するとまったく同じことを表現しているように見える。しかし上述のとおり、表出文においては「寒い」という感覚だけにフォーカスがなされており、そこに「私」は現れてこない。それは、感覚の主体である「私」自身さえも話し手に自覚されていないという状況である。つまり、「寒い！」という表出文においては、話し手自身がその事態に没入し、寒いという感覚そのものと、それを感覚している主体が未だ分化されていないという状況があらわになっている。それが、(1a) および (2a) の表出文である。

以上を鑑みて記述文と表出文の違いを簡潔にまとめると、対象や主体が明示されているか否かということ、言い換えれば、話し手による事態把握の分節化が進んでいるか否かであることになる。このことから、真理値が出現するのも、話し手による事態把握の分節化が進むことによってであるという仮説が立てられる。

4. 表出文から記述文への変遷に伴う主体性の変化

では、事態把握の分節化とは具体的にどのように進むのか。そもそも、事態把握の分節化が進むとは、話し手と事態の関わり方が変化していくことにほかならない。つまり、単に「寒い！」というレベルから、何を寒いと感じるのか、あるいは誰が寒いと感じているのかを自覚し、感覚そのものと自分自身および対象を切り離して考えるようになることである。別の言い方をすれば、感覚−主体−対象の関係性の度合いが変化することであるとも言える。

そこで、日本語の感情形容詞述語文を対象に、感情−主体−対象の関係性の変化が文にどのように反映されるのかについての分析 (王, 2013) を見ながら、事態把握が分節化されていく様子を詳しく追っていきたい。

以下は、感情主体（私) および感情対象 (X) の明示の仕方を 4 種類の異なるパターンに分類したものである。

(3) a. うれしい！
b. X がうれしい。
c. 私はうれしい。
d. 私は X がうれしい。(王, 2013, p. 195)

これらは、感情主体である一人称代名詞「私」が明示される場合 (3c・d) と、明示されな

い場合 (3a・b) に二分される。(3a・b) は、「感情主体–感情」の関係が暗示的である。つまり、感情主体である話し手はその事態に没入しているため、感情そのものと、感情を感じている自分とが分化されておらず一体化している。このとき感情は自然反射的に表出されるため、(3a・b) は主客の融合性が高い表現となっている。

ここで、「主体性」という概念を導入しておきたい。主体性とは認知言語学 (cognitive linguistic) において使用される概念であり、言語学者のラネカー (R. W. Langacker) により「主体化 (subjectification)」として提唱されたものである (Langacker, 1990) 。われわれが何らかの対象を言語化して表現しようとする場合、われわれ自身は概念化の主体であり、対象はその客体である。通常はこのように主体と客体とが分離するが、ときにその役割が曖昧になることがある。たとえば、われわれが眼鏡を手にとって見ているとき、その眼鏡は「知覚の客体」である。しかし、眼鏡をかけて何か別のものを見ているとき、眼鏡は「知覚の主体」の一部となり、その存在が意識されることはない。このように、本来客体であったものと主体とが融合されるのが「主体化」である (河上, 1996, p. 195)。つまり、「主体性が高い」とはその融合の度合いが高いことを意味する。それゆえ、客体と主体とが融合している主体化の状態は、むしろ事態把握の分節化が進んでおらず、原初的な表出の状態が保たれていることを示している。本論文では、主客が融合していることを主体化と呼ぶこのラネカーの着想を援用し、以下、感覚主体と感覚対象が融合している度合いが高いことを「主体性が高い」と呼ぶ。

話を戻すと、一人称代名詞「私」が明示されない (3a・b) は主体性が高い一方で、他方 (3c・d) は「感情主体–感情」の関係が明示化され、感情表出における話し手の自覚が強い。それゆえ、(3c・d) は (3a・b) よりも主体性は低くなり、客体性は高くなる。つまり、話し手は自然反射的ではなく、自分に何らかの感情が起きたことを自覚し意図的に表出をおこなっている。要するに、事態把握の分節化が進んでいるのだと解釈できる。

話し手と感情の関係は、(3a) と (3b) の間、および (3c) と (3d) の間にも差異があり、互いに主体性が異なっている。まず、(3a) は感情主体と感情対象の存在が一切明示されないため、主体性が最も高い。この場合、感情表出に対する自覚が最も弱く、感情はありのまま自然反射的に表出されている。したがって、感情表出の度合いが最も高い。

(3b) では特定の感情対象 X が明示されることにより、感情と X との関係が焦点化され、(3a) の場合よりも事態把握の分節化が進んでいる。それゆえ、(3b) は (3a) よりも客体性の度合いが高く、主体性の度合いが低い。というのも、(3a) の自然反射的な表出から (3b) の具体的な対象についての感情表出となることで、その対象へと感情を向ける主体の存在が暗示されることになるためである。このことから、(3b) の感情表出の度合いは (3a) の

場合と比べて低くなる。

次に、(3c) と (3d) には共に一人称代名詞「私」が明示されているが、両者の間にも主体性の差異が見られる。(3c) において、話し手は一人称代名詞「私」を用いることにより自分自身を客観視し、生じた感情を分析的に言表している。さらに、(3d) では「私」と感情対象 X の両方が文中に現れる。このとき「感情主体–感情対象」の関係、および「感情主体–感情」の関係がともに焦点化されるため、「感情主体–感情対象–引き起こされた感情」の三者関係はすべて明示化されることになる。それゆえ、(3d) は最も客体化された表現となる (王, 2013, pp. 195–6)。

以上のように、(3a) から (3d) へと進むにつれて主体性は下がる。すなわち、客体性は逆に高まることとなり、それゆえ事態把握の分節化も進むということがわかる。

5. 感情／感覚主体と主体性の度合い

先述の例文「寒い！」を前章「うれしい！」の分析に照らし、主体性という観点から再度確認したい。(1) と (2) の例文を主体性の高い順に並べ替えると次のようになる。

(4) a. 寒い！
b. 部屋が寒い。
c. 私は寒い。

前章の考察を適用すると、(4a) は感覚主体や感覚対象が明示されず両者は融合しているため、主体性が最も高い。(4b) は感覚対象「部屋」が明示されるため、感覚主体との関係が暗示されることでやや主体性は下がる。そして (4c) は、感覚主体「私」と感覚との関係が明示されることで主体性は最も下がり、逆に客体性が高く表れている。この自然反射的でない意図的な表出には、話し手自身が感覚主体であることを自覚している状況が表れている。それゆえ、事態把握の分節化は最も進んでいることがわかる。

ここで、(3b)「X がうれしい」と (4b)「部屋が寒い」において暗示される感情主体および感覚主体について補足しておきたい。(3b) と (4b) で暗示される感情／感覚主体とはこの場合はたまたま話し手自身、つまり「私」である。しかしながら、このタイプの文においては、暗示される感情／感覚主体が、必ずしも「私」であるとは限らない。

b タイプの文においては、話し手と感情／感覚主体は異なる場合がある。例えば、「プレゼントはうれしい」という文は、プレゼントというものについての一般的な事実を述べている。それゆえ、ここでの「うれしい」という感情の主体は「人一般」であり、話し手で

ある「私」が必ずその中に含まれるとは限らない。なぜなら、「プレゼントはうれしい、しかし私にとってはうれしくない」と違和感なく言うことができるためである。同様に、「北海道は寒い」という文は、北海道という地域についての一般的な事実を述べたものであるため、ここでの「寒い」という感覚の主体もやはり「人一般」である。それゆえ、「北海道は寒い、しかし私にとっては寒くない」と違和感なく言うことができる。つまり、b タイプの文においては、感情や感覚の主体として話し手以外の主体が暗示される場合があり得るということである。

それでもなお、主体性の度合いは (3a)・(4a) よりも (3b)・(4b) の方が低いと言うことができる。なぜなら、それがたとえ「人一般」であったとしても、b タイプの文では感情や感覚そのものとその対象から感情／感覚主体が暗示されるためである。それらがまったくの未分化である a タイプとはその点で大きく異なる。その一方で、(3c)「私はうれしい」と (4c)「私は寒い」においては感覚主体として「私」がはっきりと明示されている。「私」が明示される分、(3b)・(4b) よりも (3c)・(4c) の方が、客体性の度合いが高くなることは明らかである。

以上のことから、「部屋が寒い」というタイプの文では、感覚対象から暗示される感覚主体が話し手本人であろうとなかろうと、感覚主体が暗示される。事態把握の分節化、そして主体性の度合いの変化は、文の述語が感情を表す形容詞か感覚を表す形容詞かという違いに関わりなく一様に進行する。それゆえ、感覚一般についての文は、感情一般についての文と同様に扱うことができると言える。

6. 対象への投射と主体への投射

では、道徳文を含む評価一般についての文も、感覚や感情一般についての文と同様に扱うことはできるだろうか。そのことを表出主義の立場から考察するために、まずここで、マッキー (J. L. Mackie) により提唱され (Mackie, 1977) 、ブラックバーンにより受け継がれた投射説 (projectivism) を取り上げたい。

投射説とは、価値は世界の側に本当に実在するわけではなく、われわれが自分の価値観を投射することによって世界の側にあるように見えているのだという考え方である。ブラックバーンによれば、われわれは世界に価値という色を塗り広げているのであり、われわれはその色が塗られた世界を見ているのだと言う (Blackburn, 1984)。この投射説は道徳文に関してなされる主張であるが、感覚や感情一般についての文との連続性を見るために、それらへの適用を以下に試みたい。

たとえば、寒さとは世界の側に実在するものではなく、われわれが感じることで初めて

現れるものである。世界の側にあるのはただ一定の空気の状態であって、それは「寒さ」ではない。われわれは自分の感じている「寒い」という感覚を世界の側へ投射することによって、「部屋」という感覚対象の側に性質として「寒さ」を帰属させている。「部屋が寒い」という文は、投射説に基づけばこのように構成されるのだと説明できる。これは感情一般についての文も同様である。

感覚を表す文についての本論文の分析を再度振り返ると、原初的状態において一体化していた感覚主体と感覚対象は、文形式の変化に応じて分化が進むことになる。感覚主体と感覚対象は、表出文では一体化しているが記述文では完全に分かれる。これらの分析における投射の位置付けは、感覚主体と感覚対象が分化する瞬間にその手がかりがある。単に「寒い！」と表出している状態から「部屋が寒い」と言い表すことで感覚対象を分化させるとき、分節化の主体は自分の感覚を対象側の性質として「部屋」に帰属させる。つまり、分節化主体が「寒い」という感覚を対象である「部屋」に対して投射するのである。

だが話はここで終わらない。事態把握の次のステップとして、話し手が「私」に自己言及する段階があるためである。事態把握の分節化は、話し手が感覚主体としての自覚のもとに発話するとき最大限進むことになる。すなわち、「私は寒い」という形で感覚主体である「私」に話し手が自己言及する場合である。だが、ブラックバーンによれば、投射とは常に世界の側に向けてなされるものであり、主体は常に投射をする側に立つことが前提とされる。それゆえ、先の説明をそのまま適用すると「主体が自分の感覚を自分自身に対して投射することで主体を分節化する」というおかしな解釈にならざるを得ない。

だが、ここで生じている混乱の原因は、「分節化主体」と「感覚主体」を同一視している点にある。たとえ感覚主体が話し手自身を指す場合であったとしても、分節化主体は常に投射をする側の者であり、感覚主体は常に投射をされる側の者である。分節化主体とは感覚主体や感覚対象を分節化する主体である。そのため、たまたま分節化主体と感覚主体が共に話し手自身を指す場合であっても、主体としてのレベルが異なる別のものとみなす必要がある。

分節化主体と感覚主体を別のものとみなす場合に言えることは、分節化主体は感覚対象に感覚を投射するだけでなく、感覚主体にも感覚を投射しているということである。感覚を感覚対象に投射するとは、つまり、ある対象がその感覚的性質を持っていると考えることである。そして、感覚を感覚主体に投射するとは、ある主体がその感覚を感じていると考えることである。感覚主体は、こうして分節化主体から感覚を投射されることによりはじめて感覚主体となる。感覚対象も同様である。それ以前の感覚主体と感覚対象は一体化しており、分節化そのものがなされていないため、分節化主体さえも現れてはいない。そ

こから、対象と主体に感覚が帰属させられることにより分節化し、明示化されることで最終的に話し手は自らを感覚の主体として自覚するに至る。そのとき、事態把握の分節化は最大限に進み、文は論理的に扱われるに値する形式を持つようになるのである。

以上のことを投射説の考えに沿って言うならば、投射は「世界の側」だけでなく、「主体の側」にもなされる。つまり、対象と主体の両方の側になされるということである。身を切る寒さの感覚だけをフォーカスをした「寒い！」という原初的表出は、徐々に世界の分節化へと進む。投射とは、その「寒い！」という未分化の感覚を世界や主体の側に押し広げることによって、世界や主体の側にあるように見るものである。これが、われわれの見ている「分節化された世界」である。

7. 道徳文から文一般へ

本論文では、表出文が真理値を獲得する様を描くことを目指して、表出文と記述文の違いと変化に注目し、そのプロセスの解明に努めた。

まず、表出文と記述文を比較し、両者の違いとは真理値の有無と、そして文中に対象や主体が明示されているか否かであるということを確認した。それらが明示されることとは、すなわち、文で表現されている事態把握の分節化が進んでいるということに他ならない。たとえば、表出文「寒い！」は、感覚そのものと感覚主体が未分化のまま発せられた原初的表出であり、話し手が事態に没入している様子があらわになっている。その一方で、記述文「部屋が寒い」や「私は寒い」には、感覚対象や感覚主体が明示されることで、両者が切り離され別個に把握されている状況が現れている。

次に、事態把握の分節化がいかにして進むのかを具体的に見るために、「主体性」という概念をキーワードとして認知言語学の研究成果を概観した。主体性とは主体と対象とが融合する度合いのことを指す。たとえば「寒い！」は感覚主体と感覚対象とが融合しているため主体性が高く、反対に「部屋が寒い」や「私は寒い」は主体性が低くなる。

これらの内容に投射説を適用すると、「部屋が寒い」については対象に感覚を投射していると解釈できるが、「私は寒い」については主体に感覚を投射するという解釈になる。私が主体に投射するというのは一見するとおかしな解釈に見えるかもしれないが、そのように考えるべき理由がある。

分節化主体が感覚を「私」という感覚主体に投射すると考えなければならないのは、5章で述べたように、感覚主体が「私」を指すだけでなく、「人一般」を指す場合があるためである。それゆえ、「分節化主体が世界の側に感覚を投射する」という方向性だけでは、「私自身の感覚」なのか「人一般の感覚」なのかという区別がつけられなくなってしまう。

それゆえ、分節化主体とは「感覚対象（世界の側）」と「感覚主体（私または人一般）」の両方の側に感覚を投射する、さらなる高次の主体なのである。投射をおこなうことで分節化主体による事態把握の分節化は進み、文が記述の形式を持つことで真理値を獲得するに至る。投射説において、記述文とは投射がなされている文のことである。

しかし、この分節化主体とは何か。これまでの議論を文字通り理解すれば、感覚を感覚主体に投射する主体として、すべての感覚主体と感覚対象の分節化に先立って存在する超越論的な主体であるように見える。だが一方で、言葉を互いに使用する中でその用法を定着させ続ける間主観的な主体であるとも考えられ、その場合には、特定の分節化主体というものは消去される可能性があるだろう。この分節化主体の内実については稿を改めたい。

投射説とは本来、価値を世界に投射することで、われわれが世界の側に価値が実在するかのように見ているという道徳文の構成にまつわる説である。しかし、これまで見てきたように、感情や感覚についての文にも同じ形で適用することができ、道徳文と事実文の垣根を取り払うことができる可能性を大いに秘めている。道徳文と事実文はまったく別のシステムで動いており両者には別の解釈が必要である、というような多大なコストを払う必要は決してない。非記述主義や表出主義はもっとシンプルな理論を構築できる可能性があり、本論文はその一助となることを目指した。

本論文では、表出主義の立場から道徳文を分析するにあたっての足掛かりとすべく、表出文「寒い！」、記述文「部屋が寒い」、同「私は寒い」という日本語の事実文の分析を試みた。しかし、これをさらに確実なものとするためにはより多くの種類の例文を分析する必要があり、それらの成果を踏まえた上で道徳文の分析に着手しなければならない。

以上の課題については別稿に譲るが、これらをクリアしていくことは、事実文だけでなく、道徳文を含めた文一般が真理値を獲得していく様を明らかにすることへと繋がるはずである。これにより、表出主義のプロジェクトは道徳文に限られた話ではなく、文一般に適用可能であるということが明らかとなるだろう。

文献

王安 (2013).「日本語の感情形容詞述語文の主体性について」,『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋秀光編，くろしお出版）所収，pp. 190–202.

河上誓作 (1996).『認知言語学の基礎』, 研究社.

久米暁 (2012).「フレーゲ・ギーチ問題の射程」,『哲学論叢』第 39 巻（京都大学哲学論叢刊行会）所収, pp. 27–45.

田村圭一 (2007).「第 1 章 道徳の本性 ―メタ倫理学―」,『現代倫理学』（坂井昭宏・柏葉武秀編，ナカニシヤ出版）所収，pp. 26–56.

Ayer, A. J. (1936). *Language, Truth, and Logic*, 2nd ed., London: Victor Gollancz Ltd., 1946.

Blackburn, S. (1984). *Spreading the word: Groundings in the Philosophy of Language*, Oxford: Oxford University Press.
Chrisman, M. (2017). *What is this thing called METAETHICS?*, 1st ed., London and New York: Routledge.
Geach, P. T. (1965). 'Assertion', *The Philosophical Review*, Vol. 74, No. 4, pp. 449–65.
Langacker, Ronald W. (1990). 'Subjectification', *Cognitive Linguistics 1*, pp. 5–38.
Mackie, J. L. (1977). *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Hamondsworth: Penguin Books.
Miller, A. (2003). *An Introduction to Contemporary Metaethics*, Cambridge: Polity.

〔関西学院大学大学院大学院研究員・哲学〕